百年前の排日移民法と今日

札幌市医師会
藤女子大学保健センター
藤井　義博（ふじい　よしひろ）

排日移民法は、阻止に尽力した日米両政府の努力が報われず、クーリッジ大統領が署名して1924年に成立した。当時のフランス駐日大使であり、日本、日本人、日本文化を熟知する詩人で戯曲家のポール・クローデルは、同年４月12日に下院において反対わずか二票の圧倒的多数にて可決された段階で、本国外務大臣に外交書簡を書き送っている。「日本に対して、これまでのところ物質的・精神的に最も大きな影響を及ぼしてきた国が、先例のない災害［1923年９月１日の関東大震災］によって日本が弱体化した折も折、故意に、公式に、しかもぶしつけに日本に与えた侮辱は、―とくに知識層、すなわち世論を、そして国の政治を引っ張っていくことのできる人々にとっては―誇り高く、根にもちがちな日本人の心に傷跡を残すような種類のものだと考えるべきである。」「しかし、新たな時代が始まろうとしています。ことによると、日本に対するアメリカの敵意の影響は、まだ完全には出尽くしていないのかもしれません［…］排日移民法の影響は、次にあげる三つの結果をもたらすのではないかと予測できるほどに甚大なものとなるでしょう。」と述べ、①「機会さえあれば、潜在的な恨みの念が政治、外交および産業の領域で現れる」、「日本国民のなかのさまざまな階層間に、連帯の感情が強まる」、②「アジアの民族とくに中国人との連帯の感情が強まる」、③「日本人は今後は否応なくそうしたアジア人の陣営に組み込まれる」ことを予言している。そして「これまで日本人は、自分たちの立場は隣のアジア大陸とは違うものであり、自分たちは黄色い肌のヨーロッパ人であると思わせるよう奮闘してきた」こと、「かなりの程度までそれに成功していた」ことを述べている[1)]。

日系移民の曽祖父をもつ簑原俊洋は、「排日移民法が日米関係に与えた衝撃は、直ちには表面化せず、むしろ癌のようにじわじわと両国の関係を蝕んでいく。そして、その結果、1920年代後半から日本は次第に対米協調路線から離脱するようになり、1931年９月18日の満州事変勃発によって、その動きは一気に加速するのである。」と述べている[2)]。そして著書の終章において、「カリフォルニア州における排日運動家たちが、日本人移民を排斥するための精神的支えとして用いたキップリング［Rudyard Kipling］による一つの詩［1889年発表のThe Ballad of East and Westの中の詩句］」を紹介している。

あゝ、東は東、西は西、両者の出会ふことあらず、
大地と空と忽ちに審判（さばき）の御座（みざ）に立つ日まで。

「この詩の言葉をもとに、日本人移民は苦渋を強いられ、さらに日米関係も深い傷を負うことになる。だが、実はこの詩には、排日運動家たちが口にすることのなかった三行が続いている。」と述べ、それを記している。

されど東も西もなく、国境、人種も、生まれもあらず、
二人の強き男子（をのこ）等が面と対ひて立つ時に、
たとひ地の両端より来るとも！

そして「キップリングがこの詩を通して伝えたかったことは、今日においても充分に通用することである。我々は、そのことを、いま一度ここで肝に銘じる必要があるのではなかろうか。」と締めくくっている。

対峙する「二人の強き男子（をのこ）等」は、神の摂理あるいは業（ごう）のせいにしないで、闘ったりよい子になったり（fawning）する、逆境体験の世代間連鎖による自律神経防衛反応を断ち切り、社会的参画の相互調整（co-regulation）を実現するポテンシャルをもっているに違いない。

しかしその実現は容易ではない。宮澤賢治（1896-1933）による日米対決のディベート劇である『ビヂテリアン大祭』では、ビヂテリアン（vegetarian）を、食物を選別する菜食主義の個人ではなく、むしろ主義者の集合名詞として、食べても肉食は当然のこととはしない普遍的な宗教の精神と定義し、それを仏教の日本人の「私」がポジティブな包摂性の能動的想像を生産する意識において、キリスト教の米国人に対峙して主張する。するとみな改宗を宣言する。だが、すべて祭りを盛り上げようと当初に仕組まれた大芝居であると告白されて、「私」は対峙する立ち位置を失う[3)]。

排日移民法は、成立から28年を経て、朝鮮戦争勃発後の1952年に廃止された。

注１．ポール・クローデル（奈良道子　訳）．孤独な帝国 日本の一九二〇年代．草思社，東京，1999.
２．簑原俊洋．排日移民法と日米関係．　岩波書店，東京，2002.
３．藤井義博．宮澤賢治の作品『ビヂテリアン大祭』の夢幻能形式の意義について－栄養療法の知的枠組についての研究22－　藤女子大学人間生活学部紀要 62：27-54，2025.